

# 古代ローマの奴隷制

上郷高校 古川寛 紀

## 一 はじめに 奴隷の語源

\* *mancipium* (マンキピウム) ← 「手で捕らえた者」、明らかに奴隷の紀元が戦争捕虜であったことを示している。

\* *servus* (セルウス) ← 「保存する」、「番をする」の意の *servare* に由来する。奴隷は元々家畜の番人であったとの解釈も生まれた。

\* *familia* (ファミリア) ← 奴隷が主人の家に属すること。家内奴隷としての古さを物語る。主人の補助労働を行う家内奴隷としての性格が強く、法の上での人格が完全に否定された。

## 二 「ローマ奴隷制社会論」への問い

### (1) マルクス主義からのアプローチ

マルクス主義的歴史観では「世界史の基本的法則」が語られ、奴隷制社会はこの法則の中で世界的な普遍的な諸段階の一つとして位置づけられている。しかしマルクスが『経済学批判』の序説の中で、アジア的・古典古代的・封建的・近代ブルジョワ的生産様式を世界史の普遍的・継起的発展として提示したわけではなかったことは、最近では一般的な認識となっている。マルクスが古典古代的生産様式を奴隷制生産様式として等置していたわけでもなかった。

### (2) フィンレーとホプキンス

ローマの社会を奴隷制社会と規定できるかという問題は、マルクス主義的歴史観に立つ旧ソ連や東欧の歴史家と西欧およびアメリカの歴史家の間で大きく対立してきた問題であった。この問題の論点

の一つはローマ社会の全住民の中で奴隷が占めていた割合がどれほどのものであったかということであった。しかし、この問題については、多くの研究者の間で一致をみた。それは、共和政末期から帝政初期のイタリアについては人口の約四〇%が奴隷であったことと考えて誤りではなかったということである。

### ① フィンレー

フィンレーの『古代経済』によると、ある社会において奴隷が占めていた位置 (place) の測定は、彼らが置かれていた立場 (location) Ⅱ 彼らの所有者は何者か、彼らが経済的にどのような役割を演じていたか) などが問題であるとした。この基準に従えば、奴隷は共和政末期〜帝政初期には農村部でも都市部でも大規模生産の主体で、支配者層の直接収入の大部分を提供していた。

### ② ホプキンス

ホプキンスも奴隷制社会を単に奴隷を所有していた社会から区別するために、奴隷の人口が約二〇%という数字を設定した。この割合によって奴隷が生産において重要な役割を果たすことができたとするのである。世界史では、5つの社会のみがこの基準を満たしたとする。古典期のアテネ、共和政末期〜帝政初期のローマ、植民地時代のブラジルとカリブ海諸島、一九世紀のアメリカ合衆国南部である。

### (3) まとめ

ローマ社会は全てが奴隷制社会ではなく、前一世紀の共和政末期から後一世紀の帝政初期、実際にはイタリアとシチリア島に奴隷制社会が出現したに過ぎなかった。

### 三 「外なるもの」としての奴隷

#### (1) 戦争捕虜

まず自己の共同体からはずれた「外なるもの」としての奴隷がある。ローマ人はその根源的根拠を戦争捕虜に求めた。その背景には、古代地中海世界に特有な構造がある。世界は多くの市民共同体から成り立つ。それらは互いに争う戦士たちの集団であり、ローマによる統一までそれぞれ独立したある程度の自治を有する共同体であった。このいわば「慢性的戦争状態」が、ギリシア・ローマの奴隷制を生み出す条件となった。

#### (2) 出生奴隷・人身売買・捨て子

奴隷女から生まれた子供は奴隷にされた。この場合、「外なるもの」というパーソナリティは、親から子に受け継がれる。次に、奴隷狩りや人身売買によって周辺の世界からもたらされた奴隷たちがいる。これは戦争捕虜と同じ人的な扱いを受けることになる。さらにローマ共同体からの「離脱者」がいる。両親によって売られ、あるいは捨てられた子供たちが、彼らを育てた者の奴隷になるケースである。この場合、子供たちは成人してもローマという共同体社会への受入れがされずメンバーと認められない。やはり社会の外部に置かれる存在となる。

#### (3) 債務奴隷

社会内部が作り出す奴隷のケースとしては、債務による拘束があげられよう。ローマでは十二表法において債務による拘束が規定されている。しかしこの場合でも、債務者はただちに奴隷にされるのではなく、最終的に債務が履行できない場合、「頭格に関する罰(poena capitalis)」を受け、「テイベリス川の向こう」(trans

Tiberim) 奴隷として売却されるのである【註：独語では Todesstrafe「死刑」と訳される。Caputはアタマなので斬首相当刑】。すなわち債務者は市民権を剥奪され外国に売られるのである。従って彼らはローマ社会から完全に「外なるもの」となる。

#### (4) まとめ

奴隷はローマ社会の「外なるもの」であり、その社会の構成員と人的結合を少なくとも法的には持てない存在であった。それとともに、彼ら同士でも本来は人的結合を持たなかった。戦争捕虜をはじめとして、外部から連れてこられた奴隷たちは本来持っていた人的結合を破壊されるか、あるいはそこから引き離された人々あり、「共同体なきもの」であった。

#### 四 利得を生み出す奴隷

奴隷は利得を生む「財」であった。共和政後半〜帝政前半期は、ローマの最盛期であり、同時に奴隷制もかつてない程に発達した時期である。少なくともイタリアといくつかの属州においては、奴隷制は社会経済的に見ても主要な制度であった。このような状況を生み出した条件をあげてみよう。

#### (1) 適正な価格での大量供給

この条件はローマの地中海世界征服による大量の捕虜奴隷の流入によって生じた。また、海賊や奴隷商人の活躍も奴隷の供給確保に役だった。共和政末期の奴隷の価格については確実なデータは存在しないが、大量の供給という状況から見てそれ程高価ではなかった。

#### (2) 奴隷制経営の生産物に対する広範な市場の存在

奴隷を大量に使用する経営に最も適していたのは、農業においては、ブドウやオリーブのモノカルチャー的な生産であった。紀元前

二世紀のカトロー、紀元前一世紀のワロー、紀元一世紀のクルマなどの農業経営に関する著作は、いずれもこれらの作物に重点を置いている。彼らが描くモデル農場で生産されたブドウやオリーブは、ぶどう酒やオリーブ油に加工され市場を通じて販売された。地中海地域では需要はかなりあった。ブドウ酒は日常的な飲料であるばかりでなく料理にも使われるし、酢に加工しても使われた。オリーブ油は料理・灯火に使われただけでなく、体に塗ったり香水の原料とされた。ローマ支配に服した各地域の住民はギリシア・ローマ的な生活様式を取り入れ、ぶどう酒やオリーブ油の需要も飛躍的に高まった。また、大土地所有の発達によって中小農民が多く都市に住むようになり、さらに富裕者が家内奴隷の集団を抱え豪華な生活を営んだことも需要を増大させた。イタリアの奴隷制農場はこの広範な市場をあてにすることができたのである。手工業においても、たとえば日常的な陶器がイタリアだけでなく属州への輸出向けに大量に生産された。

### (3) 適正な経営規模

大量の奴隷を効率的に使用するためには、ある程度の経営規模が必要であった。それなりの規模を持つてはじめて分業と協業が可能になる。またブドウ搾り器やオリーブ圧砕器などの大型生産用具も効率的に使用できるのである。しかしその一方で、あまりにも多くの奴隷を集中的に投入すると反乱の危険が高くなる。また奴隷労働は本来的に非自発的な労働であるから、奴隷たちを労働に駆り立てるためには整った管理・監督システムが必要になる。従って奴隷制経営の拡大には自ずから限度があった。これらの条件を満たすことができた場合には、奴隷所有者に大きな利得をもたらした。

## 五 威信の表現としての奴隷所有

### (1) 都市の奴隷 (Familia urbana)

富裕なローマ人は、都市の邸宅に多くの奴隷を抱え、身の回りの世話をさせていた。これらの奴隷は「都市の奴隷」と呼ばれ、その種類は驚くほど多岐に渡る。最も地位が高いのは執事や秘書などで、それに次いで家庭教師や医者などがいた。このような仕事には、比較的教養の高いギリシア系の奴隷が使用された。また主人や女主人の衣服などを世話する奴隷、料理人、給仕、装飾品製造および管理、管理人、乳母、仕立て人、美容師、理髪師、マッサージ師、音楽師や芸人、メッセンジャー、門番、馬丁など、家内奴隷が使用されない分野はなかった。彼らは日常的に主人との人間的接触を持っていたから、その取り扱いは、農場や鉱山の奴隷と比べ穏やかで、主人の尊敬をかちえた奴隷もいた。「都市の奴隷」は解放される機会が多かったが、その一方で主人の気まぐれやサディズムの犠牲になる可能性もあった。

### (2) 家内奴隷を持つ有力ローマ人のメンタリテイ

ローマの富裕者たちは、生活をより快適にするため多くの家内奴隷を抱えていたことは間違いないが、しかしそれと同時に見せびらかしという動機もあった。多くの奴隷を傳せることは、その所有者に対する世間の評価を高めることになるので、有力者たちは、威信と社会的影響力をめぐって互いに競争をしていた。世間の尊敬を集め、高い官職を獲得して死後にまで名声を残すことは、ローマ人にとっては経済的な利益に劣らず重要な関心事であった。元老院議員や騎士などの最高の貴族層ばかりではなく、地方都市の名士層や奴隷身分から解放された者も同様であった。これらの階層の方が上昇

志向があり、「名士にふさわしい生活」を強く求めていた。

奴隷解放は、解放金受取りや事業要員の確保といった経済的利害ばかりではない。奴隷を解放して寛大な主人であると思わせることは、威信と名声を高める手段であった。剣闘士の見せ物も、それを催すことによって名声を高めるものであった。直接に選挙の票集めを狙ったものもあったが、多くは剣闘士奴隷を主催し、見事な見せ物を催すことによって自分への社会的評価を高めることも狙いのひとつであった。多くの有力者にとって、見せ物はローマ人の徳目の一つである「気前のよさ」を示す手だてであった。

## 六 奴隷制の衰退

### (1) マックス・ウェーバー「奴隷枯渴説」

「ローマによる平和」が確立すると、奴隷の供給源である戦争捕虜が減少し、その結果奴隷制は衰退した。ウェーバーは「奴隷のコロヌスへの接近、すなわち、農業労働者の農夫への変化はローマ帝政時代の最も重要かつ疑問の余地のない事実であった」(『ローマ農業史—公法および私法に関するその意義』)と述べているが、フィンレーは次の三つの観点から批判した。

- ① 時期的なずれ。一世紀においても奴隷労働の重要は高いこと。② 征服後、ゲルマン人を奴隷にすることも可能だったこと。
  - ③ 輸入奴隷や出生奴隷で埋合わせができたこと。
- 従って戦争捕虜の供給減が奴隷制衰退の直接的原因でないとした。

### (2) 属州経済の自立「イタリアおよびシチリア島の奴隷制所領の空洞化」

ロストフツェフは『ローマ帝国社会経済史』で、帝政初期のイタリアの「資本主義的」「科学的」農業経営は、ぶどう酒を中心とする

生産物販売輸出を目的に奴隷制労働で行われたが、西方属州の発展によってシェアが下がり、コロヌスを使用する穀物生産を行う農業経営に移行したと主張した。

しかしこれについても、「西方の属州経済の自立」は実証できず、またコロヌスを利用した穀物生産は共和政末期から急増しているが、ぶどう酒やオリブ生産を基本とする奴隷制直営地経営とは「棲み分け」がなされていたのである。

### (3) マルクス主義「奴隷制社会から封建制社会への移行」

帝政前半期に普及していた奴隷制所領経営が、階級矛盾の激化と、その結果としての労働生産性低下によって衰退し、しだいに生産への関心・意欲のある奴隷やコロヌスに分割地が与えられる農業経営に移行した。マルクス主義では奴隷制と小作制の優劣が問題とされるが、奴隷制経営も適正規模で経営されれば生産性が高い。小作制の普及は別な問題から発生している。ワローやコルメラも『農業論』で、奴隷制農場の周辺、遠隔地や肥沃でない土地での穀物栽培では小作制が勧められている。従って奴隷制所領を補完する制度として有効であった。

### (4) 奴隷制と小作制

奴隷制直営地経営は、特殊な諸条件が重なって成立し、高い生産性を保つことができた。同時に、この経営は「適正規模」というべきものがあるが、逆に一定規模以上に経営することもできないのである。奴隷は本来積極的に働く意欲がない(働くことが自らの利益に直ちにつながる)のであるから、これを労働に強いるためには、コルメラが述べているように整った監視人制度が必要であった。この組織に属するのは非生産的な人員であるため、限度以上に拡大

するのはむしろ不経済であった。加えて多くの奴隷を一カ所に集めるに  
にくい。そのため大土地所有者たちは、所領を拡大しても奴隷制による  
直営地は一部にとどめ、残りの土地は小作に出すのが得策と考  
えていた。

従って、奴隷制経営に高い生産性を与えていた諸条件が失なわれ  
はじめると、小作制への移行は徐々に進んでいった。

### 《参考文献》

- 『岩波講座世界史 古代2』岩波書店 一九五九  
『岩波講座世界史4 地中海世界と古代文明』岩波書店 一九九八  
弓削達「ローマ帝国論」吉川弘文館 一九六六  
弓削達「ローマ帝国とキリスト教」河出書房新社 一九六八  
弓削達「地中海世界とローマ帝国」岩波書店 一九七七  
吉村忠典編「ローマ人の戦争」講談社 一九八五  
桜井・本村著「ギリシアとローマ」中央公論社 一九九七  
伊藤貞夫・本村凌二編「西洋古代史研究入門」東大出版会 一九九七  
青柳正規「ローマ帝国」(岩波ジュニア新書) 岩波書店 二〇〇〇  
土井正興「新版 スパルタクスの蜂起」青木書店 一九九〇  
島田誠「コロッセウムから読むローマ帝国」講談社選書メチエ 一九九九  
吉村忠典「古代ローマ帝国」岩波新書 一九九七  
フィンレー編「西洋古代の奴隷制」(古代奴隷制研究会訳) 東大出版会 一九七〇

マックス・ウェーバー「古代社会経済史—古代農業事情」

渡辺・弓削訳 東洋経済新報社 一九五九

坂口 明「2世紀および3世紀初頭のコロヌスの法的・社会的  
地位—イタリアを中心に—」

『史学雑誌』八六一—四 一九七七

坂口 明「*servus quis colonus* について—奴隷制農業衰退

の—側面」(弓削・伊藤編『古典古代の国家と社会』)

東大出版会 一九七七

坂口 明「ローマの農業」弓削編『地中海世界』

有菱閣新書 一九八〇

ロストフツェフ「ローマ帝国社会経済史」坂口訳

東洋経済新報社 二〇〇一

M.I.Finley: *Slavery and Modern Ideology*

M.I.Finley: *The Ancient Economy* 一九七三

K.D.White: *Roman Farming* 一九七〇

K.Hopkins: *Congerors and Slaves. Sociological Studies in Roman  
History, Vol.1* 一九七八

(坂口明『西洋古典学研究』二九 一九八一)

K.Hopkins: *Death and Renewal: Sociological Studies*

*in Roman History, Vol.2*

(南川高志『史林』六八一— 一九八五)